

随

想

明治維新で都の地位を失い、危機を迎えた京都の先人達は、「子どもさえしっかり育てれば未来は明るい」、「地域の子どもは地域で育てる」との信念の下、竈のある家は全てお金を出し、共に汗をかいて、明治2年に日本初の64の地域制の小学校を創設・運営されました。「竈金の精神」と称されています。まだ身分差別の残る時代に、みんなが共に学ぶ学校を創設・運営された先人の公の精神、志の高さに感服します。

今、子どもに「公の精神が育つてない」、「志がない」と嘆かれます。その一方で、「自分の子どもだけは良い学校に」等と我が子中心の現実も。子どもを云々する前に、大人に先人のような精神があるのでしょうか。反省させられます。我が子と同様に地域の子どもの幸せを願い、社会の宝として心を尽くされた先人に脱帽です。先人に学び、今、京都では共に汗をかく「共汗」による改革が進められています。

近年、多くの方々が京都の学校を視察頂きます。異口同音に驚かれるのが、教職員のモチベーションの高さと、保護者・地域、更には大学、経済界等の積極的な参画です。子どものためには、学校と家庭、地域、三者の連携が要です。しかし、批判しあっている現実が多々あります。先ず情報の共有。そのため学校は説明責任を。情報の共有が課題意識・危機感の共有へ。それを行動の共有へ高めて、「評価」も子育ての喜びも共有していく。全校で外部評

「竈金の精神」と「共汗」



価を含む学校評価を実施し公開、また、2万人のボランティアの協力を得るなど、三者が足りないところを補い合い、高め合う「連携」が前進しつつあります。連携と言うと、とかく相手に求めます。当然です。しかし、教職員の意識と行動が変わらねば、保護者、地域は

変わらない。「連携とは、先ず自ら変わること」。その上で「あなたは子どものために何ができますか」と大胆に提言する。学校の「閉鎖的体質」を改め、専門性を高めることにより、信頼関係が築かれつつあります。

熱意溢れる教職員の実践に裏打ちされた1万1千点の資料が並ぶカリキュラム開発支援センター（夜9時まで、土曜日も開館）には、年間約1万人の教員が訪れ、また128の自主研修会と連携した教員研修も進み、次代の教

京都市教育長

門川 大作

員を育成する「京都教師塾」には、551名もの学生や社会人が参加。

昨夏、榎本市長のマニフェストで、全校へのクーラーの設置が実現（政令市の設置率は10%未満）。教職員はそれに応え、夏休みを短縮。更に入学式も約5日早めて4月4日にし、全国

トップの授業日数205日以上を確保。学校給食も7回増。更に榎本市長は、独自予算で中3生「30人学級」実施。こうした教職員やボランティアの熱意と教育を重視する市政に、感謝の気持ちでいっぱいです。

保護者・地域が学校運営に参画する学校運営協議会の設置校（コミュニティスクール）が18年度60校（全国では145校）、19年度は100校以上に。48の大学との協定締結による約2千名の学生ボランティアの活躍。経済界等の全面協力による職場体験や生き方探究・キャリア教育、障害のある子どもたちの教育の充実と職場開拓。「堀川の奇跡」「西京の奇跡」など公立校の復権モデルとして賞賛される市立高校改革。教職員や保護者、地域の潜在力が発揮され、大学や経済界とも融合した改革が着実に進み、関係者の努力に頭が下がります。

なお、課題は山積しております。前進すれば新たな課題も見えてきます。教育に関わる全ての人間が、当事者意識を持ち、公開、参画、評価、改善をキーワードに、「共汗」による改革を、スピード感を持って推進する。その理念と成果、課題を教育再生会議の論議に反映させていきたいと心しております。